
とある作家の一方通行

武芸者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある作家の一方通行

【Nコード】

N6469Y

【作者名】

武芸者

【あらすじ】

もしも一方通行が漫画を描いていたら？

まあ、中の人ネタですね。漫画を描く一方さんと平和な学園都市をお楽しみください。

ネタ、番外編、基本ギャグ。シリアスなにそれ美味しいの？

ちなみにこの作品はArcadiaにも投稿しています。

第1話 作者取材

小さい頃、物語に出てくるヒーローに憧れた。

ブラウン管の向こうの世界、小説や漫画の向こう側の世界、悪役を倒し、ヒロインを護る正義の味方に憧れた。

だが、その憧れは所詮、絵空事のような妄想だ。誰でもヒーローに、正義の味方になんてなれるはずがない。そんな存在になれるのは、僅かな選ばれた者達なのだと思う。

少なくとも自分には無理だ。そう決め付け、ヒーローになるなんて夢は早々に諦めていた。

だが、世の中は何が起こるのかわからない。だからこそ面白いのだ。確かに自分はヒーローにはなれなかった。だけど、今はそのヒーローを創り出す仕事をしている。

「上条、これ、背景に校舎頼むわ」

「おう」

原稿用紙をアシスタントに手渡す。

手渡した人物、この部屋の主は新たな白紙の原稿を取り出し、コマ割りをして絵を描き始めていた。漫画家、それが彼の職業だ。

学生と言う身分でありながらとある週刊雑誌に連載し、読者に絶大な支持を得ている人気作家である。

「ああ！？帝督ン、そこはスクリーントーンだって言っただろオがよオ！何ベン同じこと言わせンだア？」

「わ、わりい……ってか一方通行！その呼び方やめろって言っただ

ろっが」

作家の名は一方通行。アクセラレータ連載している漫画のジャンルは学園異能バトル物。タイトルは『クロウ』。鳥のような黒翼を持つ少年、九朗が主人公だ。

「無駄話はいいから、早く原稿上げろ。明日には木原くん原稿取りに来んだぞ」

「ちっ……わかってるよ」

「一方通行、背景出来たぞ」

「そオカ」

アシスタントは上条当麻と、かみじょうとうま垣根帝督。かきねていとく

この2人を扱き使い、一方通行は漫画を描いていた。

「……おい」

「なんだよ？」

不機嫌そうな一方通行の声。

何事かと思う上条に向け、一方通行は彼が描き上げた原稿を机に叩きつける。

「なんなんですかこれはア！？俺ア校舎って言ったよな？いや、確かにこれは校舎だ。だが雰囲気的に、展開的にここは上品そうな、例えるなら常盤台みてエなお嬢様学校のような校舎だ。これはダメ

エの通っているボンクラ学校の校舎だろオが!!」

「酷くね? ってか、そう言う指示は先に出しとけよ」

「ンなモン、雰囲気で読めよ。何年アシスタントしてんだデメエ?」

「いや、まだ数ヶ月なんだけど……」

「言い訳はいいんだよ……ったく」

一方通行はぼりぼりと頭を掻き、深いため息を一つ付く。
そして唐突に、

「しょうがねエ、取材行くか」

そんなことを言い出した。

「はあ、取材? 木原さん明日原稿取りに来るんだろ?」

「ンなモン余裕だろーが。まずはこの背景をどーにかすンのが先決だ。上条、帝督ン、常盤台に行くぞ」

「ちょ、待てよ一方通行」

「やれやれ……」

上条と垣根の不満を他所に、一方通行はデジカメを手にして常盤台へと向かうのだった。

「最近の中学生は発育いいなア……」

「ちょっと待てえ!!」

その取材、一方通行と上条、垣根の3人は学園都市の中でも5本の指に入る名門校、常盤台中学を訪れていた。

学園都市どころか世界有数のお嬢様学校であり、義務教育終了までに世界に通じる人材を育成することを基本方針としている。

生徒数は200人弱と少ないが、その質はかなり高い。レベル5、2名、レベル4、47名、それ以外は全員レベル3の能力者だ。

在学条件の一つにレベル3以上であることが含まれており、全生徒の能力干渉レベルを総合すると生身でホワイトハウスを攻略出来ると噂されるほどのとんでもない学校だ。

学園の園と呼ばれる場所にあり、そこにはいるのには大変な苦勞をするが、第一位と第二位に常識が通用するはずがなかった。

「これやばいだろ？何してんだお前え!？」

「ウルセエな。取材だよ取材。校舎の写真は撮ったし、ついでに眼福をだな……」

「それがやばいって言ってんだよ!」

現在の季節は夏だ。夏休み前であり、最近だんだんと暑くなっている。

そんな期間限定の体育の授業、水泳。一方通行達は校舎を撮影した

デジカメ片手に、今度はプールで戯れる少女達の水着姿を撮影していた。

「帝督ン、今の子何点だ？」

「90点。中学生であの胸は反則すぎるだろ。お前は？」

「うーン、50点？いや、巨乳は別に嫌いじゃないけどよオ、俺的にはもうちょいつつましい方がだな……」

「アクセロリータ」

「あン！今なンつつた！？冷蔵庫にすつぞ、コラ！」

「ちょ、落ち着けてっ！ってか、マジでまずいだろころ！盗撮だろ？犯罪じゃねえか！！」

一方通行と垣根を宥めつつ、全うなことを言う上条だったが、当の一方通行と垣根はその発言を一笑する。

「おいおい、イイ子ちゃんぶってンじゃねエぞ三下ア」

「お前も男だろ？なら興味あるよな？むしろ、女に興味が無い男なんていないと断言する」

「いや、上条さんだって確かに健全な男子ですよ。確かに女の子には興味があります。けどよ、こんなことをしなくても……」

「だからイイ子ちゃんぶってンじゃねエよ！一級フラグ建築士様は余裕ですなア」

「まったくだ」

「いやいや、何ですかその聞いたことも無いような職業は？上条さんはまったく女性にはもてませんよ。むしろ顔が良い一方通行と垣根の方がもてるんじゃないんですか？」

「……おい、こいつ殺さねエか？」

「いいな、それ。幻想殺し（イマジンブレイカー）がどれほどのもんか、俺の未元物質と一方通行で試してやるよ」

「うえ！マジですか！？」

表情を歪め、楽しそうに会話を交わす一方通行と垣根だったが、当の上条からすればまったくものではない。

学園都市のトップツーカー相手に勝てるわけが無い。もっとも、一方通行と垣根も本気ではなく、冗談だったので敵意は皆無だ。

「冗談だよ、誰が三下なんか相手にするか」

「心臓に悪いからやめてくれよ……ん？」

一方通行の言葉に胸を撫で下ろす上条だったが、あることに気づいて気まずそうな表情を浮かべる。

「そこでなにをしている？」

「あ、その……これはですね」

それは警備員の存在。取材と称して訪れた常盤台だが、当然アポなんて取っているわけが無い。

不法侵入であり、しかも一方通行はデジカメで少女達の水着姿を撮影していた。言い訳のしようが無い犯罪行為、盗撮だ。

「おい！一方通行……」

「お、アレなんかよくね？あのつつましい胸なんて最高だねエ」

「相変わらずそっちの趣味がよ、アクセロリータ。ん、アレって第三位じゃね？」

「マジか？」

しかも、もはや言い訳不能な会話を交わしており、警備員は確定的な視線で上条達を見つめている。

「……ちよつと警備員室まで来てもらおうか」

「いや、ちよつと待ってください！いや、ホントに待って！一方通行！垣根！！」

「あん？」

「ん？」

警備員に手をつかれ、引き摺られそうになった上条は藁にも縋る思いで助けを求める。

上条の声に反応して、一方通行と垣根は上条へと視線を向けたが……

「じゃあな」

「あばよ、三下」

「え、えええええ！？」

状況を把握するなり、あっさりと上条を見捨てて2人は逃げ出した。垣根は自身の能力、未元物質で天使のような羽を創り出し、それで空を舞う。

一方通行も能力で、ベクトルを一点に集中させて空に落ちるように飛ぶ。

見捨てられ、取り残された上条は肩をがっしりとつかまれているために逃げることは出来ない。

「不幸だあああああああ！！」

少年の悲しき叫びが、常盤台中へと響いた。

それでも平穏な日常。今日も今日とて、学園都市はとても平和だった。

第1話 作者取材（後書き）

基本、一方さんは変態です。ロリです。帝督ンもロリではないけど似たようなもの。

そんな二人に巻き込まれ、不幸な上条さんをお楽しみください。

第2話 編集会議

『クロウの人気は文句なし、読者アンケート1位。この調子で頑張ってくれ』

「はいよ、統括理事長……もとい編集長」

モニター越しに行われる会話。

学園都市が出版し、日本中で発売されている漫画雑誌、『週刊少年サタデー』

その会議が画面越しに行われており、クロウの担当である木原数多編集者は編集長の言葉に相槌を打つ。

『では、続いての議題だ。今後の新連載作品のラインナップだが……』

ネットワークによりサタデーの編集部全体がつながっており、自室にいながらにして編集長、編集者全員と対話することが可能である。外部より30年は進んでいる学園都市最先端のネット回線を引いているため、ハッキングなどの対策も万全だ。

そんな中で、日本で2番目に売れている漫画雑誌は作られている。ちなみに1位はジャ○プだ。

『この作品を見てもらおう。削板軍覇作のド根性ゲコ太だ』

「いや駄目だろ？色々とアウトだろ！？」

連載会議の中、編集長が送ってきた漫画に木原は突っ込む。

パソコン越しだからこそ出来る、データの送付。その速さと気軽さ

には重宝するが、それとこの漫画は関係ない。

木原は漫画のタイトルを聞き、読むまでもなく駄目だした。

「パクリだろ！？なんだよ根性ゲコ太って！？シャツにゲコ太が入って大活躍する話か？古いんだよ！何年前の漫画だ？つか、こいつ何歳！？」

『流石木原編集。読むまでもなく内容を理解しているとは』

「やっぱりか！？既にあるんだよ、そんな漫画！その前に勝手にゲコ太を使っちゃ不味いだろ。同人誌じゃねえんだぞ。著作権や色々問題があるだろ？」

『ふむ……言っていることはもつともだが木原編集』

「なんだ？」

木原の突っ込みに編集長は一度区切り、一度咳払いをして宣言した。

『漫画は面白ければいいんだ』

「面白いわけあるか！こんな漫画、連載なんかしたらいろんなところから苦情が来るぞ」

『果たして、この漫画を読んでからも同じことが言えるかな？』

「何グルメ漫画みたいなこと言ってるんだか……」

木原は文句を言いながらも、送られてきた漫画を読んでみる。

最初は馬鹿馬鹿しいと思っていたが、読み進めていくうちに引き込

まれていき、気がつけば最後まで読んでいた。

『どうだね？』

「……面白い」

感想は面白さだけならば文句なし。色々突っ込みどころはあるが、内容自体はとても満足のいくものだった。

「設定はあの漫画のパクリだが、内容はまったくの別物だ。ってか、何で主人公が番長になり、他校の生徒と乱闘してるんだ？ゲコ太がシャツの中に入った意味は何だ？これってギャグ漫画って言うよりヤンキー漫画だろ？だが、ヤンキー漫画と言う分には面白い」

『そうだろう？なら、連載は決定だな』

「いやいや、だからそれはねえって、編集長。さっきも言ったがこれを連載したらいろんなところから苦情が来るから。今回は没だが削板には普通にヤンキー漫画を書いてもらったほうがいい。戦闘描写はうまいし、友情・努力・勝利の3本柱をしっかりと押さえている。少し古い気はするが、ある意味それが新鮮で人気が出る気がするぜ」

『……それもそうか』

木原の指摘にモニター越しの編集長は暫し考え込み、決断を下した。

『よし、今回は見送ろう。削板軍覇にはその路線で新たな作品を描かせるとして、今回の連載作品はこの作品に……』

その後も論議を交わし、会議は進んでいく。

連載する作品、今回で打ち切り、終わらせる作品を話し合いで決め、会議ももう終わりだと言う時間帯、編集長が思い出したように木原へと声をかけた。

『ああ、そうだ木原編集。大事な話があるんだが』

「ああん？」

編集長からの大事な放し。それを聞き、木原はすぐさま携帯電話へと手をかけた。

『喜^{アクセラ}べ一方！アニメ化決定だ』

「マジでか木イイイ原くウウウウン！？ヒヤッホーイ！」

場所は変わり、一方通行の仕事場。

そこで原稿を描いていた一方通行は、木原より告げられた吉報に喜びを露にする。

『マジだ。色々やることはあるが、既に決定事項だから安心しろ。しかも時間帯はゴールデンタイム。1年間やることは決定してて、視聴率によっては続編をするそうだ』

「いいぜエ、超えてやるよ。ワン。ースとナ。トをなア！！」

『期待しているぞ』

電話を切った一方通行は、何かと作業の手を止めている垣根と上条に向け、高々と宣言した。

「アニメ化決定だア、野郎共！今日は祝うぞ、うまいもん食いに行くぞオ！！」

「マジか！？この漫画もついにそこまで……」

「奢りでせうか？苦学生の上条さんとしては、一方通行の懐の広さを期待してそんなこと聞いてみたり……」

「そうに決まってるだろオが、三下アア！腹がはちきれんほどにうまいもんを食わせてやんよ。肉だ、焼肉行くぞ！お前、松坂牛なんか食ったことねエだろ？」

「うおおおお！！幸運だあああああ！」

アニメ化の話題に盛り上がり、作業をやめて祝うために街へと向かう3人。

今日も今日とて、学園都市はとても平和なでした。

第2話 編集会議（後書き）

編集長もとい、統括理事長が誰なのかは言うまでもなく……学園都市は平和でいいんだと思いますw

目指す目的は打倒ジャ。プ！後の目的はほんのついでですw

さて、1話がこれじゃあまりにも短いので2話目にしておまけ、番外編を一つ。

番外編よりおまけの方が長いつて、これ如何に？

番外編 とある出会い

「おい、今の子達レベル高くねえ？」

「ああン？どこがいいンだ、あんな年増。俺は中学生以上は興味ねエンだよ」

「どんだけロリコンなんだよ、アクセロリータ」

「うるせエ。ロリコンは認めるが、アクセロリータはやめろつってンだろオが帝督ン。冷蔵庫にすンぞ」

「何故か冷蔵庫って聞くと、背筋が凍るんだよな……ってか、ならお前も帝督ンって呼ぶのをやめろ」

「そいつア無理な話だ」

「なら、こつちも無理な話だ」

それは1年ほど前の出来事。一方通行がまだ、クロウを連載していなかった日のこと。

知人である垣根と共に、日用品を購入するために街中を歩いていた。

「インクとスクリーントーンが切れてたなア。あとついでに、夜食用のカップメン」

「お前ってそんなもんばっか食ってんのか？そんな食生活だと早死にするぞ」

「うるせエなア。俺も料理とかしてくれる彼女が欲しいンだが、ンなモンは残念ながらいねエ。はア……どっかに落ちてねエかなア？料理上手な女の子」

「理想をぶちまけるのはいいが、自炊するって選択肢はないのか？」

「ハッ、俺が料理するタイプに見えんのか？」

「わりい、言つててそりゃないわって思った」

「だろオ？まア、料理上手かは置いといて彼女が欲シイのは事実だが」

「それに関しては同感だ」

何気ない会話が交わされる。仲の良い友人同士のたわいのない会話。そんな2人を見て、誰が学園都市のトップツーの能力者だと思っだろうか？

第一位、一方通行と共に歩くのは第二位、未元物質の垣根帝督。

「それにしても腹減ったなア……早いとこ三下と合流して飯食わねエと」

「ああ、何時ものファミレスだろ？そーいや知ってるか、一方通行。あのファミレス、よく第四位が来るらしいぜ」

「第四位？確か原子崩し（メルトダウン）か？」

「ああ、しかも知ってるか？第四位ってかなりレベルが高い美人だぜ」

「とは言っても確か高校生だろ？守備範囲外だア」

「お前は本当にロリコンだな」

「ハッ、俺からそれを取ッたら一体何が残んだよ？」

会話に中身がない、とても馬鹿馬鹿しい内容。だけどそんな会話がとても楽しく、一方通行と垣根は笑っていた。

漫画を通じて知り合った2人。何時もはこれにもう1人加わって、いろんな意味で最強無敵の3人組トリオが完成する。

その3人目とはファミレスで待ち合わせをしているため、急ごうとする一方通行だったが……

「あ、そー言えば金がねエんだった。おろさねエと」

「おいおい、待ち合わせの他にも買い物に行くんだから事前におろしとけよ」

「わりイわりイ、さて……確か郵便局にATMがあつたよなア？」

金をおろすため、近くの郵便局に向かおうとする一方通行と垣根。だが、その郵便局はどこか変だった。

「あん？」

「ああ、今日は休みだったか？」

シャッターが下りている。

平日で、時刻はまだ昼前の時間帯だ。どう考えても郵便局が閉まる時間帯ではない。

それなのにどうして、あの郵便局はシャッターが下りているのだろうか？

「あ、あの……」

「ん、なんだ？」

「ああン？」

不意に垣根の服の袖が引つ張られ、一方通行もそれに釣られるように視線を向ける。

「ひっ！？」

そこには花飾りの付いたカチューシャをした小学生くらいの少女がおり、垣根と一方通行の反応に小さい悲鳴を上げていた。

「なんだこのガキ？」

「お前の顔が怖すぎンだよ、帝督ン」

「少なくともお前には言われたくねえよ」

「で、いったいどうしたンだ、お嬢さん」

「ひゃっ！？」

「ホラ、やっぱりお前だよ」

「……………」

垣根に指摘され、一方通行は傷ついた。
顔はそれなりに整っている方だとは自覚しているが、それと同様に

目付きが悪いと言ったことも自覚していた。
怯える少女にどう接するべきか思い悩む一方通行だったが、怯えていた少女自身が話を切り出してきた。

「助けてください！」

「あん？」

そもそも当然だ。最初に声をかけてきたのはこの少女である。用が無ければ話しかけてはこないだろう。

「中で風紀委員が強盗に襲われて……！」
ジャッジメント

「風紀委員がア？」

少女が指差すのはシャッターの下りた郵便局。

風紀委員と言うのは学園都市の治安を守る組織であり、強盗などはむしろ取り締まるべき立場にいる者達だ。

それが強盗達に襲われている。その事実、一方通行どころか垣根までも怪訝そうな顔を浮かべていた。

「普通逆だろ？風紀委員を助けるだなんて」

「まア、そりゃそオだけどなア」

垣根の言葉に同意し、一方通行はめんどくさそうに頭を掻く。

その仕草に少女は今にも泣きそうな顔をし、と言いかボロボロと涙をこぼしており、他に助けてくれそうな人がいないか探そうとする。
だが、

「まア、これもなんかの縁だ。助けてやるか」

「この場にいたら、上条も絶対助けると言いそうだからな」

その必要は無かった。

そして、これで事態は解決したも同然だ。なにせ、学園都市の頂点であるレベル5、その2人が助太刀するのだから。

「おい、ひとつだけ確認すんぞ」

「は、はい!？」

一方通行の目付きの悪い視線ににらまれ、少女はびくりと肩を震わせる。

一方通行はあまり少女を怖がらせないように気をつけながら、彼にとってとても重要なことを尋ねた。

「襲われてる風紀委員つつうのはお前の友達か？男か？女か？そして何歳だ？それによつては俺のテンションが変わるんだが」

「へ……?」

最強最悪のロリコン、始動。

「コンにちはア」

「はぁ！？」

防犯シャッターが飛び散り、郵便局内の雰囲気は一変した。

強盗とそれを取り押さえようとする風紀委員の対峙。

対峙とは言っても能力の実力差はともかく、経験による差が大きく、風紀委員の少女は強盗の男に追い詰められていた。

そんな緊迫した雰囲気、そんなものは知らぬとばかりに入ってくる1人の少年。

彼は白い髪と、アルビノの肌に赤い瞳をしていた。

「エンジェル発見！いいねエいいねエ、最っ高だねエ！！可愛いじやねエか、モロ好みだコンチクショー！ロリでツインテなんて最高すぎんだろオ！」

「ひっ……」

狂気に満ちた鋭い視線を受け、風紀委員の少女……白井黒子は思わ

ず背筋を震わせる。

この不利な状況を打破する切欠になるかと一瞬だけ思ったが、不気味に笑う少年を見てとてもそうとは思えない。

だが、黒子の直感は間違いではなかった。

「なんだお前は？こいつ（風紀委員）の仲間か？」

強盗が白い少年に問い質す。

警戒し、上着のポケットに手を入れていた。おそらくはそこに得物を隠しているのだろう。

だけどそんなもの、白い少年には全く関係が無い。

例え男がどんな得物や秘策を隠し持っていようと、白い少年には通じないのだ。

「おい、怪我してンじゃねエか。こんなに可愛いのに痣でも残ったら大変だなア。だが安心しろ、スゲー藪医者を知ってんだ」

「……舐めてるのかお前？」

ゆえに白い少年は、強盗の男なんて気にしない。眼中にすらないのだ。

今、白い少年の目に映っているのは目の前の少女のみ。

「よし、行くか。なアに、医者のとこまで一っ飛びだよ」

「きゃあ！？な、何をするんですの！？」

「『ですの』？おいおい、お嬢しゃべりかよ？お前はどこまで俺のツボを抑えてくれるンですかア？本当に最っ高だよお前」

白い少年は愉快的な笑みを浮かべ、黒子を抱き上げた。
彼女の小さな体に手を回し、お姫様抱っこと言うセクハラ一歩手前の抱え方だ。

実は、白い少年は少女をこのように抱きかかえることに憧れており、実際にできて少しだけ興奮していた。

柔らかい肌触り、暖かい体温、そして彼女の髪からシャンプーの感じる良い香り。

今、白い少年のテンションは最高潮にまで達していた。

「おい、俺を何時までも無視すんじゃないぞ！」

だが、今まで無視されていた強盗がついには切れる。

白い少年に敵意を剥き出しにし、上着のポケットから鉄球を取り出した。

それが彼の得物だろう。鉄球を利用した、何らかの能力を使うのかもしれない。

だが、彼は知らない。白い少年に、学園都市最強のレベル5、一方通行に敵対することがどれほど愚かなことなのかを。

「哀れだなア、お前……このまま放っておけば見逃そうと思ってたけどよオ、俺と敵対するってんなら、マジで可愛そうになるわ。誰に対してそんなことを言ってるのかわかってるんですかア？」

「……あ？」

一方通行の馬鹿にしたような言葉に、男は完全に切れたように睨み付ける。

そんな視線をものともせず、一方通行は黒子を抱きかかえながらその場に佇んでいた。

「殺すぞ」

「やってみろよ、格下ア。お前に俺が殺れんのか？」

両者が睨み合い、殺伐とした空気があたりに充満する。
戦闘が……殺し合いが始まる。

だけどそれは、一瞬で決着が付いてしまった。

「はっはア、ざまア見ろ、格下ア！」

「……え？」

黒子には何が起こったのかわからない。気が付けば、男の方が倒れていたのだから。

「なんだよ……俺の出る幕なんてまったくねえじゃねーか」

「わりいな、帝督ン」

何時の間に現れたのか、茶髪の長身で、ホストのように、そしてチンピラのように見える風貌の少年が立っていた。

彼の名は『ていとくん』、ていと言っらしい。黒子はそう認識していた。

「強盗もぶつ倒したんなら、早く金おろしてファミレス行こうぜ。
上条も待つてるだろうしよ」

「そん前に病院だ。帝督ン、俺アこの子を……名前なんてンだ？」

「え……？あ、白井……白井黒子ですの」

「黒子ちゃんか。个性的だが、いい名だなア。でだ、黒子ちゃんを
病院に藪医者のもとに連れてくから、お前が金をおろしといてくれ」

「めんどくせえな……」

一方通行が垣根にカードを手渡し、話は一方的に進んでいく。

「あ、あの……」

「さて、行くか」

話についていけない黒子を見無視し、状況は進んでいく。

一方通行は自らが蹴破ったシャッターから郵便局の外に出た。周り
には騒動を聞きつけたのかギャラリィがたくさんおり、お姫様抱っ
こをされて出てきた黒子は正直目立っていた。

好奇の視線にさらされる中、黒子は体を張って助け出した少女の姿
を見つける。

「あ、初は……」

「しゃべんな、舌嚙むぞ」

「え？ひゃ、ひゃあああああああ！？」

声をかけようとしたその瞬間、一方通行は宣言と共に空へ飛び上がった。

いや、正確には空に向かって落ちている。自身の能力、一方通行でベクトルを一方へと向け、まるで空を飛んでいるかのように落ちていた。

「ひゃあああああああああ！？」

「はっはア、どオだ、空を飛んでる気分は？」

黒子に一方通行の言葉に受け答える余裕は無い。

彼女の能力は空間移動^{テレポート}なのだが、まだ能力が未熟で、自分自身を移動させることが出来ないために一方通行から逃れることができない。ならば一方通行自身をテレポートさせるかと思ったが、なぜか彼には黒子の能力が通用しなかった。

「なんですの？誰ですのあなたは！？」

黒子は涙目になりながら、一方通行に何者なのか問いかけた。

歪む。一方通行の表情が意地悪そうに、とても愉快そうに歪んだ。

「第一位、一方通行ですの」

黒子の口調を真似た、冗談交じりの宣言。

これが一方通行（主人公）と白井黒子^{ヒロイン}の、ファーストコンタクトだった。

おまけのおまけ

「えっと……どちら様でしょうか？」

「……白井黒子ですの」

黒子の治療を終え、一方通行はそのまま彼女を上条との待ち合わせ先であるファミレスへと連れてきていた。

当然ながら、そんな彼女が誰なのか疑問を感じる上条。名前を聞かれ、黒子は正直に自分の名前を名乗った。

「あ、これはこれはご丁寧にも、上条当麻です……で、一方通行、どこから攫って来たんだ？」

「攫って来たって、失礼な……いや、間違いじゃねエな。あんまりにも可愛かったから攫って来ちゃった」

「オオイ！やばいだろそれ！？マジで犯罪行為してんじゃねえぞ！いつかやるとは思っていたが……お前そこまで」

「うるせエな、手は出しちゃいねエよ。ちょっと一緒に飯を食うくらいだ。その後で解放してヤンよ」

「その際に一緒に頂くなんて考えてないよな？もしそうなら、付き合いを考え直すレベルだぞ」

「死ぬか？」

馬鹿らしい会話が交わされる。

友人同士の、馬鹿馬鹿しくてどうでもいいような会話だ。

学園都市のトップ、一方通行。そんな彼と何気なく会話している上条と言う少年はいつたい何者だろう？

「ドリンク注いできてやったぞ。上条はオレンジ、一方通行はコーヒーだろ？」

「おう、わりーな」

「サンキュー」

そして、郵便局でも見た『ていと』と言う少年。彼らはいったい、どういった関係なのだろう？

「好きなもん、じゃんじゃん頼め。俺の奢りだア」

一方通行が黒子のあたまをくしゃりと撫で、陽気にそんな事を言うてきた。

正直、頭を撫でられるのはあまり好きじゃない。せつかくセツトした髪が乱れてしまうから。

「マジで！？じゃあ、俺は……」

「ただし三下、テメーはダメだ」

「なんで！？ってか、ボーボボ！？」

だけど、頭を撫でられるのが何でこんなにも心地よいのだろう？
何でこの雰囲気、馬鹿馬鹿しいこの空間がこんなにも楽しいのだろう？

「上条、俺が奢ってやるよ」

「うおお！天使様あ！！」

「うわ、抱き着くんじゃねえ！」

「くかか！」

黒子はとても不思議な心境で、この3人の馬鹿騒ぎを見つめているのだった。

あとがき2

一方通行の連載前、そしてヒロインの登場。

漫画版、とある科学の超電磁砲の3巻に収録されてるあの話ですね。
黒子可愛いよ、黒子w

当時の初春、あんな派手な髪飾りを付けてないんですね。いった
い、中学に入学する間に何が起こった!?

ちなみにこの一方さんはロリコンです。シリアス、何それ美味し
いの?

基本はギャグ全開でいきたいと思います。

第3話 早過ぎる覚醒

「かアアアみ条くウウウウン!!」

上条当麻は、今日ほど己の不幸を悔いたことはない。

何時もどおりの、些細(?)な不幸。だけど今回は取り返しが付かないことになってしまい、学園都市第一位の一方通行を本気で怒らせてしまった。

事の発端はこれまたいつものどおりの、アシスタントの工作中。ベタを命じられ、上条は原稿用紙と格闘していた。が、その最中にベタ用のインクを零してしまい、上条は原稿を台無しにしてしまう。

黒く染まってしまった原稿。それと比例するように黒いものが一方通行の背中から噴出していた。

黒い物体が背中から噴出され、それは『クロウ』に出てくる漆黒の翼のように見えた。

「i h b f 殺すwq」

嫌な汗が全身から噴出してくる。上条は恐怖でガチガチと歯を鳴らし、無言で垣根に助けを求めるような視線を向ける。

この場で第一位の一方通行を止められそうなのは、第二位である未元物質の垣根くらいなものだ。

だが、その垣根が、第二位である彼が、部屋の隅で縮こまり、ガタガタと肩を震えさせていた。

「アレは不味い、アレは不味い……嫌だ、冷蔵庫にはなりたくない……」

どういった理由かはわからないが、垣根はあの漆黒の翼にトラウマ

を抱えているらしい。

垣根には頼れないこの状況。上条は何とか打破しようとあらゆる考えを巡らせるが、悲しいことに彼の出来の悪い頭では何も案が浮かばなかった。

「た、助け……」

上条は恐怖に怯え、幻想殺しを発動させる余裕すらなかった。体が硬直し、がくがくと全身が震えている。

そんな上条に向け、一方通行の手がすつと伸びてくる。

「へ……？」

何が起こったのかわからない。何があつたのかもわからない。

ただ気が付けば、上条は星となった。音速の数十倍の速度で吹き飛び、窓を突き破っていた。

意識なんてものは簡単に途絶え、生死を確認するのが馬鹿らしく思えるほどだ。

だけど信じよう、彼が生きていることを。根拠は何もないが、上条当麻ならばきつと生きているはずだ。

「ちつ、間抜けが……どオスンだ、おい？木原くん3時には原稿取りに来ンだぞ」

上条を始末し、正気に戻った一方通行は時計を見て言う。

現在、時刻は昼の2時50分。後10分もすれば木原が原稿を取りにやって来てしまう。

「よりによってこのページかよ。一番手間がかかったページじゃねエか……げ、こっちのページにもインクかかってやがる」

原稿用紙は数枚駄目になっており、時間内に描き直すことは不可能だ。

一方通行は悩み、考え込み、あることを決意した。

「帝督ン、ちよつといいか？」

「冷蔵庫はいやだ……え？」

ぶつぶつとつぶやいていた垣根に声をかけ、一方通行は思いついた案を実行する。

「一方通行！原稿できてんだろっな？」

木原がドアを蹴破る勢いで仕事場へと入り、催促の声を張り上げる。本職は研究員らしいが、それに見合わない屈強な肉体を持つ編集員、木原数多。

顔面刺青に金髪と言う強面の彼は最恐の編集員（さいこふ）と呼ばれており、締め切り内に必ず原稿を取り立てることでも有名だ。

「なんだあ……？」

だが、その木原もこの部屋の惨状には首を傾げる。窓ガラスは割れており、辺りには白紙の原稿用紙が散らばっている。この仕事場は男所帯で、元から片付けが得意な彼らではないからこ

の現状には納得がいく。窓が割れていることに関しても、喧嘩でもしたのだろうという認識だ。要するに、木原は彼らのことを手のかかるガキだと認識している。

そして、今回も存分に手を焼かされそうだ。

「あの、糞ガキ……」

この部屋には誰もいない。いるのは木原1人であり、部屋は静寂に包まれていた。

散らばっている原稿用紙。だが、重しを載せて押さえられてある1枚の原稿用紙に、一方通行の字で何か書かれていた。

『取材に行つてきます。今週は作者取材による休載ってことですよしく、木原くん』

読み終わった木原は、ぐしゃりと原稿用紙を握りつぶした。

「もオすぐ夏休みだな。まア、俺アそんなもん関係ねエけど」

「お前は殆ど引き籠もってるからな。だからモヤシみてえな体してんだよ」

「うるせエ、世の中の漫画家は運動不足に悩まされるもんなんだよ」
締め切りを諦めることにした一方通行は、垣根と共に学園都市の街中を歩いていた。

上条はここにはいない。一応救急車を呼んだので、運が良ければ力エル顔の医師によって蘇生させられるだろう。

故に2人で、一方通行と垣根は当てもなく歩いていた。

「そう言えば身体測定がもうすぐだな。システムスキャン まあ、レベル5の俺達からすればどうでもいいイベントだけだよ」

「レベル5、ね……そういや、ずいぶん前にレベル6にならねエかって誘われたなア」

「はあ、レベル6！？マジかよおい……で、どうしたんだ？」

歩きながら談笑をしていた垣根が、一方通行の言葉に驚愕する。

人間に神様の計算はできない。ならば、まずは人間を超えた身体を手にしなければ神様の答えには辿り着けない。そう言った理由で頭の開発を行い、神様とやらの頭脳を手に入れようとしているのがここ、学園都市だ。

レベル6とはまさに神にも等しい存在。学園都市の頂点と呼ばれるレベル5だが、それとはまるで比べ物にならない。

「断ったよ。今更絶対能力者（レベル6）に興味ねエし、そもそもあんな実験をやったら漫画を描く時間がなくなるしな」

「いろんな意味でスゲーよ、お前」

学園都市の最終目標を嘲笑う一方通行に、垣根は色々な意味で感心していた。

なんとかと天才は紙一重と言うが、一方通行にはそれが良く当てはまると確信する。

そのどちらなのは、付き合いの長い垣根でも判断しかねてしまうが。

「で、その実験の内容ってどんなのなんだ？」

「腐りきった、クソツタレな実験だよ。スライムだけ倒して、99までレベルを上げるようなもんだ」

「もはや苦行の域だな。俺だったらぶち切れるぞ。はぐれメタル狩りたくなりそうだ」

「それはそうと聞いてくれよ、帝督ン。最近さア、黒子ちゃんの間が変態染みてンだけど……なんか中学に入ってから、明らかにおかしくなってきたンだけど……」

「黒子ちゃんって、確かお前が前に助けた、ジャッジメントの女の子だよな？ ツインタールのあの子。あの子がどうかしたのか？ それから、お前に変態と言われたらお終いだと思うぞ、アクセロリータ」

「帝督ン、後で締める」

何時ものように馬鹿馬鹿しい会話を交わしながら、とりあえず一方通行と垣根は公園の方へと向かった。

喉が渴いたので、自販機でジュースでも購入する予定だ。

「ってか、変態染みたって具体的にはどんな風にだ？」

「具体的に言うとな……なんか百合っぽくなった。超電磁砲は知ってんだろ？どオモそいつにゾッコンらしい」
レーザガン

「マジかよ！？確か常盤台に通ってるんだって。女子校となると、やっぱりそういった奴らがいるんだな」

「百合やお姉さまなんて存在は、何も漫画だけの話じゃないんだな。もしかしてロザリオとか渡されてんじゃないかね？」

公園内の敷地に入る。夏と言うこともあり、強い日差しが肌を焼くように照らす。

その上日本の夏は湿度が高く、むしむしと暑苦しかった。

「それにしてもあつちい！ホントになんなんだよ、夏って。クーラーの利いた部屋から出るもんじゃないな」

「貧弱だなア、帝督ン。この程度の暑さで根を上げやがって」

「能力で気温も反射してる奴に言われたくねえよ。だからお前はもやしなんだ」

「お前も能力使えばいいだろ。お得意の未元物質を使つて、冷却効果のある物体でも出しやがれ。それかあの翼で自分自身を扇ぐとかよオ」

「お、いいなそれ」

一方通行の提案を素直に呑み、垣根は自身の能力である未元物質を発動させる。未元物質とはこの世に存在しない素粒子を生み出し、

操作する能力。

今、垣根は自分の周りの空間にその物体を生み出した、冷却効果のある物体。垣根の周りの空間は急激に温度が下がり、心地よい空間を創り出す。

だが、彼が未元物質を使用する時には副作用とも呼べる現象が起こる。背中に天子の様な白い、6枚の翼が生えるのだ。

公園内にはそれなりに人がいた。そんな中で、かなり目立つ垣根の能力。

「帝督ン、少し離れて歩いてくれます？」

一方通行は翼を展開して歩く垣根から距離を取り、辛辣に言い放った。

「それはないだろ。ってか、お前の提案だったよな？自分でも何やってんだと思ったけど」

「平和な頭してンな、メルヘン野郎」

「心配するな。自覚はある」

「自覚あんなら改める」

自販機はすぐそこ。飲み物を購入するために財布を取り出そうとする一方通行だが、自販機の前に立っていた1人の少女に興味を持ち、その手を止めてしまった。

「ちえいさーっ！」

気合と共に自販機に上段回し蹴りを放つ少女。彼女は先ほど話題に

出た黒子と同じ、常盤台の制服を着ていた。おそらく、お嬢様なのだろう。

だが、取った行動はともお嬢様には見えない。どこの世界に、自販機に上段回し蹴りをするお嬢様がいるだろう？

しかも常盤台の制服はスカートの丈がかなり短く、その下に隠れているものが完全に露になっていた。

一方通行はそれを凝視したが……

「短パンかよ！返せ、俺の淡い期待を返しやがれ！！」

「一方通行、その気持ち……良く分かるぞ」

残念な結果に、垣根と共に肩をがつくりと落とした。

「なんなのよあんた達？」

大声を張り上げ、あからさまに肩を落とす2人を見て、自販機を蹴った少女は不審そうな目付きを向けてくる。

その手には先ほどの蹴りで自販機を刺激し、強奪したジュースが握られていた。

やはり、常盤台のお嬢様とは思えない光景だ。だが、彼女は最強無敵の電撃姫、常盤台のエースだった。

「ン、良く見たら超電磁砲じゃねエか。むしろ第三位がジュースの強奪って何やってンだよ？」

「マジかよ、超電磁砲ってこんな奴だったのか？幻想をぶち殺された気分だ……」

「いきなり何よ！？そもそも、趣味の悪い服着てる白い奴と、背中

に翼を生やしてる奴に言われたくないわよ」

第三位、御坂美琴^{みさか みこと}の行動に問題があったが、見知らぬ2人にどうこう言われるのは心外だった。

しかも2人はかなり怪しい格好をしている。

一方通行は肌も髪も真っ白で、目付きの悪い真っ赤な瞳をしている。服は黒に白いラインが入っており、シマウマのような服だった。

垣根は言うに及ばず。少しホストっぽく、チンピラのような格好をしているが別に悪くはない。だが、背中に白い翼を生やしているのが大きなマイナスだった。

「おう、おっかねエ。別にお前に用があるわけじゃねエよ。ジュース買おうと思ったただけだ」

「そういうことだ。悪いけど、ちょっとどいてもらえるか？」

ただど一方通行と垣根は気にせず、ジュースを購入しようと自販機の前に立つ。

一方通行が財布から硬貨を取り出し、投入した。買うのはもちろんコーヒー、しかもブラックだ。彼はこれ以外を飲む気はしない。

ボタンを押す。だが……

「あん？」

コーヒーは出てこなかった。ちゃんと金を入れたと言うのに、自販機はうんともすんとも言わない。

「何だこれ？壊れてンのか!？」

「ああ、この自販機ってたまにお金呑むのよね」

「おいおい、学園都市って最先端の技術が詰め込まれた実験都市だろ？なのに自販機ひとつがこの有様かよ」

美琴の言葉に垣根は呆れ、ならばどうするかと考える。

確か、この近くにコンビニがあったはずだ。そこでジュースを購入するかと思っていると、未だに自販機と格闘している一方通行は次第に苛立っていた。

「くそつ、マジでふざけんな！」

「仕方ないわねえ。ここで会ったのも何かの縁だし、私が……」

美琴が能力を用い、何とかしようかと申し出る。

だが、彼女が行動するよりも早く、一方通行が行動を起こした。

「ベクトルパンチ！！」

要するにただのパンチ。だけどあらゆるベクトルを操り、一点に威力を集中させた一方通行のパンチは強力だった。

直撃を受けた自販機はひしゃげ、トラックに撥ねられたように吹き飛ぶ。破損し、中からは缶ジュースが幾つも出てきた。

先ほどの美琴の上段回し蹴りが可愛く思えるほど、強引で乱暴な購入方法。その方法に、垣根は激しく突っ込んだ。

「おい！お前何してんだ！？さっきなんて言ってた？強奪云々言ってたのはお前だろ！？」

「金を入れたんだ。わりイのはこのポンコツだろ」

「ホントにポンコツになっちまったがな。スクラップになっちまったがな」

一方通行は垣根の突込みを聞き流し、散乱した缶ジュースの中から目的のもの、ブラックコーヒーを取り出す。

ついでにその中から一本取り出し、垣根へと放り投げる。

「ホラよ」

「おつ、サンキュー」

「ンだよ、なんだかんだ言ってもジュースは受け取んだな」

「それはそれ、これはこれだ。やっちまったもんは仕方がな……何だこりゃ!？」

素直に言いながらも缶ジュースのプルタブを開け、ジュースを口に
した垣根だが、口にした瞬間に噴出してしまった。

舌を刺激した味に瞳を白黒させ、垣根は自分が手にしている缶に目
を落とす。それには『いちごおでん』と表記されていた。

もはや学園都市の名物といえる不気味なジュースのひとつ。この手
の飲み物を好物とする者もいるが、垣根はそうではなかったようだ。

「どんなチヨイスだ!？何、お前って俺嫌いなのか？」

「まっさかア、大好きだぜ帝督ン。手下として、何より玩具として
なア」

「お前死ねよ」

ニヤけた笑みを浮かべて宣言する一方通行に毒を吐きつつ、垣根は中身の残っているいちごおでんの缶を捨て、散らばっている別の缶を手に取る。

選んだのは『ヤシの実サイダー』。いちごおでんやきなこ練乳と言った不可思議な飲み物に比べ、比較的ましで美味しいと思える飲み物だった。

「あんた凄いわねえ。能力者でしょ。レベルは何？」

一部始終を見ていた美琴は自分で購入（強奪）したジュースを飲みながら、一方通行を問い質す。

自販機を吹き飛ばしたあのパワー、少なくとも見てもレベル3、もしかしたらレベル4はあるかもしれない。

美琴は知らなかった。彼らに能力のレベルを聞くのがどんなに愚かなことが。

第一位、一方通行。第二位、垣根帝督。彼らは2人とも美琴より上であり、越えられない実力差を持った超能力者（レベル5）。

「あー、俺か？よし、おしえてやんよ。耳の穴かつぽじって聞きやがれ超電磁砲」

「そつえば、私のことは知ってるのね」

「まアな、お前は色々有名だからよオ。で、俺のことだが……」

一方通行が高々と名乗りを上げようとする。

美琴は思わず息を呑み、自然と耳を澄ませていた。

一方通行の口が動いた。その時、

「俺ア学園都市第い……」

「おい、やばいぞ一方通行！」

「あん？」

垣根に声をかけられ、一方通行は名乗るのをやめる。

垣根のほうを振り向くと、彼はある一点を指差していた。釣られ、一方通行はその方向に視線を向ける。

するとそこには、ヤクザすら裸足で逃げ出すような形相を浮かべた男が全速力でこちらへと向かっていた。

「アクセラレエタアアア！！」

「やべ……木原くんじゃん」

「逃げるぞ」

「合点承知イ！」

「あ……」

そう言つて、追つて来る男から逃げ出す2人。

木原と呼ばれた男も美琴には見向きもせず、そのまま一方通行達を追って行った。

その結果、美琴1人が取り残された形となる。

「……なんだったのよ？」

ぐびっとジュースを呷り、美琴はポツリと漏らした。

一方通行、白い少年は、翼を生やした少年にそう呼ばれていた。――

方通行と言つ単語で、美琴はある人物を思い浮かべる。

「まさかね」

だが、それをすぐさま否定した。

学園都市第一位、一方通行。それがあんな人物だとは思えない。

少しだけ気になっていた美琴だが、あることを思い出し、すぐに興味が失せる。

「そういえば、今週のクロウまだ読んでいなかったわね。コンビニに立ち読みに行こうつと」

第一位と第二位、そして第三位。これが彼らの初遭遇だった。

第3話 早過ぎる覚醒（後書き）

原稿を台無しにされ、あまりにも早過ぎる覚醒。相変わらず不幸の上条さん。これぞ上条クオリティw
ちなみに美琴はクロウの読者。まあ、立ち読み専門なんですけどね。

第4話 アフレコ現場

「うおお！声優さんがいっぱいだ」

「そんなにはしゃぐな、帝督ン。恥ずかしいだろオ？」

「いや、ですが一方通行さん。これは流石に上条さんでも緊張する
のでせうが……」

現在、一方通行一行はとあるスタジオに居た。

ここにはオーディションで選ばれた声優達が集まり、アニメのクロ
ウ、第1話の収録が行われるのだ。

今回、一方通行達はその見学に来ていた。

「流石は最先端の技術が使われてる学園都市のスタジオだなア。見
たこともないスゲー機材がたくさんありやがる」

「それもスゲエけどよ、やっぱり一番は声優さんだろ。今更だが、
よくこんな豪華声優陣を集めることが出来たな」

垣根は出演する声優陣の名を確認し、感心していた。

主要キャラはもちろん、脇役に関しても有名な声優が名を連ねてい
るのだ。

これはファンとしてはたまらない。

「ヒロインに麦のんってのが最高すぎる！『狼と塩胡椒』で水口役
をやってた麦のんだぞ！？最高すぎるだろ！」

「ああ、最っ高過ぎるなア。だが帝督ン、麦のンと言えば水口じゃ

ねエ。『明後日のナージャ』のナージャに決まってんだろオが。なにせ麦のンのデビュー作だぞ！しかもロリキャラだぞ！！あの作品こそ麦のンを語る上で必要不可欠の名作じゃねエか」

垣根と一方通行が熱く語る声優、麦のんこと麦野沈利。むぎのしずり

ここ最近頭角を現してきた人気声優であり、幼女から大人の女性・おとなしい女性・純粋な女性・明るいタイプの女性・気の強い女性・男勝りの女性・妖艶な女性・少年・動物キャラなど、様々なタイプのキャラクターの声を演じ分けることの出来る万能型だ。

しかも見た目に華があり、アイドル声優としてかなりの人気を誇る。一方通行はストライクゾーンを外れているために容姿に興味はないが、垣根は麦のんの大ファンだった。

「上条さんも麦のんは好きですね。大人のお姉さまタイプは大好物ですよ」

「三下ア、お前も麦のんのファンなのか？俺ア声は好きだけだよオ、いや、見た目も悪くはねエと思うよ。うん、美人だと思う。ただ歳がな、高校生以上はどうも受け付けねエって言うか……」

「お前病気だわ。一回精神の医者に行け」

「心配すんな、帝督ン。ロリコンだって自覚はある。だが、アクセロリータって言ったら殺す」

「じゃあ、セロリ」

「ベクトルパンチ」

「1」ぶっ！？」

馬鹿馬鹿しい会話を交わし、一方通行にパンチを喰らって吹き飛ばす垣根。

ふと時計を見てみると、あと少しで収録が始まる時間になっていた。集まりだす声優達。その中の1人、目を引くほどに美人な女性がつこりと笑顔を浮かべて近づいてきた。

「初めまして。あなたが『ひとかたみちゆき』先生ですね？私、今回ヒロインの黒井白子役をやらせていただくことになった麦野沈利と言います。よろしくお願いします」

「ああ、どうもです。ご存知とは思いますが、クロウの作者のひとかたみちゆきです。今日はよろしくお願いします」

麦のんこと麦野沈利との対面。

一方通行は漫画を描いているときのペンネーム、『ひとかたみちゆき』で自己紹介を済ませ、麦野と握手を交わした。

「うわあ、うわあつ、スゲー。本当にスゲー。本物の麦のんだ！」

「はしゃぐな三下、見っともねエぞ。すいません、麦野さん。こいつアうちのアシスタントの上条つつうんです」

「あ、その、上条当麻です。俺、麦野さんの大ファンなんです！あの、握手してもらってもいいでしょうか？」

「はい、いいですよ」

柔らかい笑みを浮かべ、手を前に差し出す麦野。上条はしっかりとそれを握り、嬉しそうに言った。

「俺、この手一生洗いません！」

「なんともまあ、アイドルと握手した奴の典型的な台詞だなア。マジでそれを実行する奴ってインのか？2、3日経ったら忘れて、普通に手を洗いそうなんだ」

一方通行はどうでもいいことを言いながら、キョロキョロと辺りを見渡す。

周囲には麦野以外にも、たくさんの著名な声優達がいた。誰かに声をかけようかなんて思い悩んでいると、先ほど一方通行の拳で吹き飛ばされた垣根が復活する。

「麦の……ん！好きだ、結婚してくれえ！！」

しかも、何故だかど真ん中ストレートのプロポーズ付き。

「もう一発、ベクトルパンチ」

「ふっ……馬鹿な、この俺が……」

が、興奮していた垣根は再び一方通行の拳を喰らい、ばたりと地面に倒れる。

その様子を麦野は、引き攣った表情で見ていた。

「すいません、こいつ馬鹿なんで気にしないでください。頭中がメルヘンな野郎なんですよ。ったく、レベル5の品格に関わるだろオが」

「いえいえ、びっくりしましたが別に気にしなくても……レベル5

？」

部下の不始末に謝罪する一方通行だったが、麦野は彼の言葉に、『レベル5』と言う単語に過敏に反応した。

「そオナンですよ、見えないでしょ？あいつ、学園都市第二位の未元物質なんです。まア、俺も第一位の一方通行なんですけどね」

「え、ええ……レベル5の第一位と第二位？」

「普通驚きますよね、そんな奴が漫画描いてたら」

驚愕している麦野に上条はうんうんと頷き、同意を示していた。だが麦野は、一方通行と垣根の正体を聞いて急に雰囲気が変わる。めんどくさそうに頭を掻き、先ほどまで使っていた敬語が抜け落ち、気軽そうな自然体で口を開いた。

「まあ、私もレベル5の第四位なんだけどね」

「あつれえ？なんか麦野さん、雰囲気変わってません？つてか、第四位って……」

麦野の雰囲気の豹変、第四位と言う単語に今度は上条が驚愕した。第一位と第二位が揃って漫画を描いているだけで驚愕するには十分な内容だが、まさか第四位が声優をやっているとは思わなかった。しかもここには、3人の超能力者（レベル5）がいると言う事になる。これはもしかしたら、何かの事件の前触れかもしれない。

「原子崩し（メルトダウン）か……ただの同姓同名かと思ってたら、まさか麦のンが第四位本人だったとはなア」

一方通行からも敬語が抜け落ち、意外そうに麦野を眺める。

「こつちもびつくりよ。まさか学園都市第一位さまが漫画を描いてるとわね。よくよく考えれば『ひとかたみちゆき』ってあんたの能力名の一方通行を揆ったペンネームだったのね」

「そオいうこつた」

互いに不気味な笑顔を浮かべ、笑い合う。微笑ましさとは無縁の、緊迫した笑い声。

その雰囲気の上条は居心地の悪さを感じ、胃痛を覚えるほどの嫌悪感に襲われた。

脳裏に浮かぶのは第一位と第四位の激突。もしそうならば、このスタジオが崩壊するのは当然だろう。

幻想殺しと言う反則染みた能力のある上条だが、彼は右手以外は少し（かなり）打たれ強いだけの並みの高校生である。もしそうならば逃げの一手しかない。

今すぐにでも走り出しそうになったところで、麦野が動いた。

「ところで第一位、お願いがあるんだけど」

「ン、言ってみろ」

ごくりと上条が喉を鳴らす。

彼女が持っていたバックからごそごそと何かを探り、それを一方通行に差し出した。

「サインくれないかしら？ 私声優以外にも副業やってるんだけど、その同僚があんたの大ファンなのよ」

それは色紙とサインペンだった。上条は思わずつつこける。

「いいぜエ。俺アファンは大事にするんだ。で、宛名はどオすればいいんだ？」

「フレンド、お願いね。それに個人的で1枚もらえる？それには宛名を書かないで。その方がネットオークションとかで高く売れそうだから」

「本人を前にして、そんなこと言うかア？」

言いながらも要求どおり、2枚のサインを書き上げる一方通行。

隅にはおまけとして、クロウの主人公である九朗がデフォルメされて描かれていた。

「ありがとう。それからさっきも言ったけど、今日はよろしくね」

「おう、こちらこそなア。白子役頑張ってくれ」

収録開始の時間も迫り、最後にそう言葉を交わして別れる麦野と一方通行。

それを啞然と見ていた上条は、今更ながらにつぶやいた。

「今日も平和だなあ……」

あまりにも平和すぎる学園都市。明日もそうだといいなと思いながら、収録の様子を嬉しそうに見学する彼らだった。

第4話 アフレコ現場（後書き）

クロウアニメ化。そのアフレコ現場。そして麦のん声優ですw
声優業をやってる麦のんですが、裏では立派にアイドルとして活躍
していますのでw

ちなみにゲーム版だと麦のんの声優さんは小清水亜美さんなんです
よ。ですので狼と塩胡椒の元ネタはもちろん狼と香辛料、明後日の
ナージャはもちろん明日のナージャですね。

それとお分かりでしょうが、黒井白子は黒子がモデルとなっています。
主人公の名前が黒羽九朗^{くろはね くろう}。キャストを公開するとこんな感じです。

主人公

黒羽九朗 食蜂操祈

ヒロイン

黒井白子 麦野沈利

ライバル

白石恭也 黒妻綿流

敵か味方が謎の美少女

高峰美緒 木原那由他

ってな感じです。裏話をする理想郷掲載時はまだ第五位の正体つ
てわからなかったんですね。ですから当初は手塚心という名前、
芸名でした。

まさか第五位があんなキャラだったとは……みさきちかわいいです

W

第5話 七月十六日

「そう言えば身体測定が^{システムスキャン}あったらしいじゃねえか。お前ら、結果はどうだったんだ？」

「あん？」

ファミレスにて、一方通行の担当である木原がこの席に座っている全員に問いかける。

今日は打ち合わせであり、垣根や上条も交えて意見の交換をしていた。

「上条さんは相変わらずのレベル0でせう……」

「幻想殺しは身体測定じゃ解明できねえからな。一体、どんな原理で能力を打ち消してるんだ？あ、それはそうと俺も相変わらずレベル5認定です」

「俺もだ。もつとも俺が第一位で、帝督ンは第二位なんだ、当然だろ」

「相変わらず優秀なことで。父ちゃんは嬉しいぜ」

「誰が父ちゃんだ、誰が。能力開発をして、その研究をしただけじゃねえか」

クロウに対する話し合いは終わったので、今は注文したものを食べながら無駄話を交わしている。

一方通行と木原はブラックコーヒーを啜り、垣根はパフェ、上条は

ステーキセットをがつついていた。

「それはさて置いてだ、お前普段はちゃんと飯食ってんだろ？連載前はカップメンばかり食ってたんだろ？漫画家は体が資本だからな。外食ばかりじゃなく、ちったあ自炊しろよ？」

「聞いてンですかア、木原くん？親じゃねアンだからんな心配すンなつての。それに、どっちかってエと、父ちゃんと言うより母ちゃんだな」

「勘違いすんなよ。お前が心配だからじゃねえ、クロウの存続が心配なんだ。作者急病で休載なんて読者に申し訳ねえからな」

「ツンデレ入りました」

「黙ってろ、帝督ン。オイ、三下ア。コーヒー淹れて来い」

「ん、ああ、わかった」

一方通行は舌打ちを打ち、上条に命令を下す。

基本的善人で、打ち合わせと言うことで出版社から出る金でただ飯を食える髪譲渡しては文句なく、快く一方通行の申し出を受けてからドリンクバーへと向かった。

一方通行は頬杖をつき、上条が戻ってくるまでそのままボーっとしていようと思ったところで、再び木原に声をかけられる。

「それはそうと一方、^{アクセラ}お前、意中の相手がいるそうじゃねえか？」

「ぶっ！？なんで知ってンですかア？木イ原くウウン！」

その予想外の言葉に、一方通行は思わず噴出してしまった。

「しかも常盤台のお嬢様らしいじゃねえか。お前も意外にミィハーだっただなあ」

「バツカ、そんなンじゃねエよ。アレだ、運命って奴？黒子ちゃんを初めて見た時にこうびびって電流が走ってだなア」

「運命、か。最先端の科学が集う場所でそんなことを言うんなぞ、変わったな、一方通行」

「それは木原くんもだろオが」

だが動揺をすぐさま抑え、一笑するように木原をあしらったのは流石だろう。

一方通行は上条の淹れて来たコーヒーを口にする。

「んじゃ、今後の方針としては新たなライバル登場と言うことで。やっぱ少年漫画の王道はバトルだからな。それに異能が加わり、中二っぽければなおよし。まあ、要するに何時もどおりに描けて事だ」

「わアってンよ。なんかトラブルがねエ限り、原稿は締め切りまでに上げっから心配すンなつて。こないだみてエなことアそうそうねエよ」

「それならよし。さて、俺はこの辺で失礼するぜ。なにせ多忙の身だからよ、これから第七位と打ち合わせだ」

「ほオ、あの根性馬鹿の新作が出来上がったのか、そりゃ期待だな

ア
」

「追い越されないように頑張れよ」

「おいおい、誰に言ってるんですかア、木原くウウン！俺ア、サタデーナンバーワンの人気作家、ひとかたみちゆきですよ。あんな根性馬鹿に負けるわけがねエだろオがよ」

「だが、油断してつと足元を掬われることも確かだ。驕んなよ」

そんな会話を交わし、木原はレシートを取って会計を済ませる。一方通行は舌打ちを打った後、残りのコーヒを一気に飲み干すのだった。

「木原くんも心配性だよなア。どやってたら俺があいつに負けるってんだ？」

「でも、木原さんの言うことも確かだよな。第七位がどんな奴なのか知らないけどよ、そんな考えたと本当に足元を掬われるぞ」

「要は驕るなってことだ。初心忘れるべからずってな」

その後ファミレスを出て、一方通行は上条と垣根を引き連れて街中を歩いていた。

頭に残るのは先ほどの木原との会話。それを思い出して不機嫌そう

につぶやく一方通行だが、上条と垣根の忠告を受けて幾分か冷静になる。

「それもそオか……最近、クロウのアニメ化とかで調子に乗ってたかもなア。だからこそここア一旦気を引き締め、初心に戻るべきかもしれないねエ」

「そう言う事だ。なあ、上条」

一方通行の言葉に垣根が相槌を打ち、上条に同意を求めようとする。だが上条はある一点を見詰め、そこを指差しながら2人に問いかけた。

「なあ、あそこの銀行。何で昼真つからシャッターを閉めてんだ？」

「あん？」

「どれどれ？」

上条につられ、一方通行と垣根はシャッターの閉まった銀行を見つめる。

今日は平日であり、時間はまだ午後の1時くらいだ。どう考えても銀行が閉まるには早すぎる時間帯。

その様子を見て、ふと一方通行はあることを思い出した。

「なア、帝督ン……」

「ああ、この展開って……」

それは垣根もだった。一方通行とまったく同じ事を思い出し、1年

ほど前にあったある事件を思い出す。

その次の瞬間、爆発と共にシャッターが弾け飛んだ。

「なっ!？」

「やつぱりなア……」

「本当に学園都市には、ああいうロクでもない奴らが多いよな」

驚く上条とは打って変わり、一方通行と垣根は深いため息をつく。
あの時は郵便局だったが、今度は銀行だった。爆発の煙の中から飛び出してくる3人組の男の姿を確認し、一方通行はもう一度ため息を付きながら言う。

「まア、銀行強盗なんて漫画じゃありふれた内容だが、アイデアの足しにはなんだろ。取材を含めて、ちいっとばかり締めてくるか」

「俺も手伝おうか？」

「何言ってるんだ帝督ン。あんな格下、俺1人で十分に決まってる」

「まあな、言ってみたただけだ」

「えっと、上条さんとしては、思わず銀行強盗の方々に同情してしまいます……」

3人組の男、銀行強盗に哀れみの視線を向ける上条。
彼らは運がなかった。偶然ここに居合わせた人物が、学園都市最強の能力者なのだから。

「ン、あれは……」

一方通行が動こうとした。だが、あることに気が付いてその動きを止める。

逃げようとする男達の前に立ちはだかる1人の人物。常盤台の制服に身を包み、右腕には風紀委員の証しを付けたツインテールの少女。その姿を見て、一方通行の口元がニヤリと緩む。

「風紀委員ですの！器物破損および強盗の現行犯で拘束します！！」

白井黒子だ。1年前に一方通行が運命的な出会いを感じた女性。

ロリ、ミニスカ、ツインテール、お嬢べしゃりと一方通行のストライクゾーンと真ん中である少女であり、クロウのヒロイン、黒井白子のモデルとなった人物だ。

そんな人物が目の前で、今、果敢に銀行強盗と対面している。

「嘘ッ！？何でこんなに早く……ん？」

銀行強盗の内1人が、あまりにも早すぎる風紀委員の登場に驚き、堂々と宣言した黒子の方を振り向く。

その姿を確認し銀行強盗達は、彼らは沈黙し、顔を見合わせていた。その様子を不審に思う黒子。次の瞬間、銀行強盗達は一斉に笑い出した。

「ギャハハハハハ！どんな奴が来たかと思えば風紀委員も人手不足かあ？」

それは嘲笑だった。あの名門校の常盤台の制服を着ているとはいえ、黒子の見た目は銀行強盗達に舐められるほどに幼い。

実際の年齢もこの間中学に上がったばかりなので、現在13歳。しかも女性。

文字通り女子供が相手では、銀行強盗達が強気に出るのも仕方のないことだ。

だが、だからと言って納得できるわけがなく、黒子は舐められたことによる憤りを感じていた。

「そこをどきな、お嬢ちゃん。どかないとケガしちゃうぜー!!」

「ああ、お前がケガしちゃうなア」

「へぶっ!?!」

そしてそれは、一方通行も同じだった。

銀行強盗の内の1人、2メートルはあるのではないかと言う巨漢の男が黒子を押しのけようと近づいていく。

だがそれは、黒子を馬鹿にするように笑われて切れた一方通行が飛び蹴りを放って阻止する。

「一方通行さん!?!」

「だアあれの事を罵ってるんですかア、この格下がアア!死にたいンですね?死にたいンだな、ゴラアア!!!ンならお望みどおり殺してやンよ!」

「へぶっ、はぶっ!ぬべら!?!」

一方通行の登場に黒子が驚きの声を上げる。

だが、そんなことはお構いなしに一方通行は巨漢の男に追撃をかけていた。

倒れた男に馬乗りになり、マウンドポジションのまま拳を振るう。
何発も何発も男の顔面を殴り続け、一方通行の手は赤く染まっていた。

「君がッ、泣くまで、殴るのをやめないッ！」

「やめろ一方通行！泣く泣かない以前にまず死ぬ！！」

「なら死ね」

上条が羽交い絞めにして一方通行を止めるが、一方通行はなおも上条の腕の中で暴れ続けている。

漫画ばかり描いていて、能力の関係で陽光（紫外線）にまったく当たらない一方通行はもやしのような貧弱な体型をしているが、それでも暴れる男を取り押さえると言うのにはかなりの体力を要する。そんな様子に見かねた垣根が、冷静に一方通行を諭した。

「とりあえず落ち着け。漫画家が利き腕で人を殴っちゃ駄目だろ」

「そう言う問題！？」

だが論点がずれており、上条の突っ込みがびしりと入る。

「そっぴやそオだな。なら、左手で殴り続けるかア」

「ちょ、本当にもうやめろ！相手のライフはもうゼロだ！！」

「……………」

いきなり出てきて、騒々しい口論を交わす一方通行達。

黒子はなんと言ったらいいのかわからない表情を浮かべ、取り残されたような感覚でその様子を眺めていた。

「て、テメエ等……」

だが、銀行強盗達はそうはいかない。仲間をやられ、怒りに燃えた瞳で一方通行達を睨みつけ、殺気を向ける。
手を振りかざし、その手には炎が宿っていた。

「ほオ、パイロキネシスト発火能力者か」

その火力はなかなかのものだった。冷静になった一方通行は発火能力者の男を見詰め、それがレベル3に値する能力だと判断する。
なかなかの能力者だ。そう、『なかなか』……だが、その程度では一方通行に、学園都市最強の化け物に勝てるわけがない。

「おもしれエじゃねエか、俺と能力で戦おうってエのか？ハッ、それがどれだけ無謀なことか理解してンのかア？」

「うるせえ！お前だけはぶっ飛ばす」

「やってみろよ。おい、三下。お前は離れてろ」

「……殺すなよ」

「あア」

冷静になった一方通行は上条を下がらせ、発火能力者の男と対峙する。

発火能力者の男から炎が放出される。それが一方通行を焼き尽くそ

うと一方通行に襲い掛かる。

だが、そんなもの一方通行には通用しない。ベクトルを操る彼には届かない。

運動量、熱量、光、電気量等などといったあらゆるものにはベクトル（向き）が存在し、観測し、触れただけで変換させるのが一方通行だ。

能力にも当然ベクトルが存在し、それを一方通行は操り、炎を向かった相手に向けてそのまま跳ね返した。

「はっ……！？」

発火能力者の男には何が起こったのか理解できなかった。

一方通行が漫画を描く時意外は常に展開している反射。これは一方通行の意思に関係なく、デフォルトで設定することが出来る。そうなった一方通行にはある例外を除いて攻撃が通用しない。

例えば音速や光速を超えた攻撃だろうと、一方通行はそのまま相手に反射してしまう。上条のような右手を持っていない限り、編集である木原のような特別な体術を使わない限り、一方通行にはどんな攻撃も通用しないのだ。

「あああああっ！？」

呆気にとられていた発火能力者の男は跳ね返ってきた自らの炎に焼かれ、絶叫染みた悲鳴を上げる。

衣服が黒焦げとなり、理解できないと言った表情で弱々しくつぶやいた。

「い、一体……なにが……」

おそらく疑問が尽きないであろう発火能力者の男に向け、一方通行

は凶悪な笑みを浮かべて堂々と宣言した。

「知らねえか？運動、熱、電気、あらゆるベクトルを変換する能力者のことをよオ。銃弾や爆撃はおるか、例え核ミサイルの直撃を受けても傷ひとつ付かないなんて言われてンだ。さア、俺が誰だか理解できるか？レベル5の頂点と言われてる俺の名前はなんだ！？」

「んな……馬鹿な……お前が最強最悪の能力者……あくせら、れえ……」

発火能力者の男は一方通行の名を言い切る前に血に倒れ、気を失ってしまった。

正確には『一方通行』と言うのは能力名で彼の本名ではないのだが、そんなこと些細なことだ。

「さて」

一方通行は最後の銀行強盗に視線を向ける。

巨漢の男は真っ先に倒したし、発火能力者は自らの炎で焼かれて気を失った。残るはこの男1人で、一方通行は僅かながらの期待を抱いて言う。

「少しは楽しませてくれよなア」

「ひい！？」

だが、男は恐怖に支配されて情けない悲鳴を零した。

学園都市最強の能力者、序列第一位の一方通行を敵に回して勝てるわけがない。無理だ、逃げよう。

そう判断したのは一瞬で、男は無様にも一方通行に背中を晒した。

「……逃げやがった」

「いや、無理ないだろ」

「思わず銀行強盗に同情しちまうな……」

男が逃げ出したことにつくりと肩を落とす一方通行だったが、上条と垣根はむしろ納得していた。

この学園都市に、一対一で一方通行に勝てる者など存在しないからだ。

「ちつ……まアいい、あんな格下は放っておくか。それよりも黒子ちゃア」

舌打ちを打ちながらも早々に興味を失った一方通行は、今度は黒子へと新たな興味を向ける。

このような騒動で運命的な再開を果たしたのだ（一方通行視点）。ここは是非ともデートに誘うべきだろう。そう決心し、声をかけようとしたが……

「あつ……」

「まあ、風紀委員なんだし追うのは当然だろ」

黒子は一方通行を無視し、逃げる男を追っていた。

その事実につくりと肩を落とす一方通行だったが、すぐに気を取り直してポツリともらす。

「まア、すぐに捕まんたるオからその後で誘えばいいか。黒子ちゃ

ンから逃げられるわけねエしな」

黒子の能力は空間移動。例え100メートル走の世界記録保持者でも、彼女から逃げ切ることは不可能だ。

男は近くにいた女子中学生を突き飛ばし、車に乗り込んで逃走しようとしていた。だが、それも無駄だ。

乗り物に乗っていたとしても彼女からは逃げられない。だが、逃げられる逃げられない以前に……

「あー、黒子？」

「はっ……はい！！ですよ！」

男を追おうとした黒子が立ち止まる。

先ほど男に突き飛ばされ、反動で手に持っていたクレープが落ち、そのトップリングである生クリームとチョコレートがべったりとサマーセーターに付着した少女が、底冷えしそうな声で黒子に問いかけていた。

「これは私が個人的に喧嘩を売られたって事だから、手、出してもいいわよね？」

「あー……」

黒子はなんとさえいいのかわからず、返答に困っていた。

駄目だと断言したいが、その程度で彼女が止まるとは思えない。むしろ彼女は黒子の返事を聞く前にあるものを取り出し、車で逃げようとする男に向けて狙いをつける。

「げっ、ビリビリ中学生！？」

「なんだア、お前超電磁砲のこと知ってたのか？」

そんな彼女の姿を見て、上条はいやそうにつばやいた。

一方通行もビリビリ中学生、第三位の超電磁砲こと御坂美琴に視線を向ける。

第一位と第二位である一方通行や垣根の能力には遠く及ばないが、それでも彼女は圧倒的な力を持っていた。

最強の電撃使い（エレクトロマスター）と呼ばれ、超電磁砲と呼ばれる必殺技を持つ。それが彼女の通り名の由来であり、攻撃力はレベル5でも上位のものらしい。

そして今、美琴はその超電磁砲を使おうとしている。コインを取り出し、それを指で弾いた。

瞬間、コインが音速の3倍の速度で撃ち出される。それは電撃を纏って真っ直ぐ飛び、前方を走って逃げようとする車に迫った。

直撃はしていない。まともに当たれば車ごと撃ち抜き、男を殺してしまう可能性があるからだろう。だがその余波で、音速の3倍を超えたことによつて巻き起こる衝撃波で車は吹き飛び、くるくると宙を舞った。

かなり重いはずの車両が空を舞う光景に上条はポカンと口を開け、ガチガチに引き攣った表情を浮かべていた。

一方通行は自然体で、どうでも良さそうに口を開く。

「銀行強盗、死んだんじゃないか？」

「死ぬよな、普通」

ガシャンとコンクリートの大地が車を受け止め、フロントガラスは完全に割れていた。

引っくり返ってしまった車からは男の姿が見え、彼は泡を吹きなが

ら気絶していた。

「よく生きてたなア……」

男の悪運の強さ、そして第三位を名乗るに相応しい美琴の破壊力、一歩間違えれば殺してしまいかねないほどのえげつなさに感心しつつ、一方通行はポツリとつぶやいた。

第5話 七月十六日（後書き）

親子みたいなやりとりをする木原くんと一方さん。この二人は本当に仲が良さそうですねw

原作では殺し合いを演じていましたけど……

そして今回、ちよこつと黒子が登場。ヒロインとはいえ、彼女の出番少なすぎないだろうかと少し不安に思います。

まあ、それはさておき最後におまけを。とある作家の一方通行、そしてフォンフォン一直線のバカップルをある作品に介入させたクロスものの嘘予告です。

「帝督ン、ここにトーン貼ってくれ」

「わかった」

それは日常。生活のサイクルと化した漫画を描くと言う作業。漫画家と言う職業に就いている以上、それは一方通行にとって当たり前だった。

「……………」

「どうしたんだ？手が止まってンぞ。そこはベタだって教えただろオが」

だと言うのに、アシスタントの1人の反応が思わしくない。

心ここに在らずと言った感じで、無言で原稿用紙と睨めっこをしていた。

「あの……凄く今更なんですけど、よくこんなことをしてられますよね？」

「ああン？漫画家が漫画描かないでどオすんだ？」

アシスタント、十代半ばぐらいの少年は戸惑いながらも口を開き、一方通行に意見した。

だが一方通行は、さも当然のように言っている。こんな状況だと言うのにもかかわらずにだ。

「いや、だって……異世界なんかに来たら、普通戸惑うでしょう？」

「だからって何時までも戸惑ってられるか。紙とペンが在れば漫画を描く、それが漫画家なんだよ。お前は女々しいんだよ、レイフォンクウン。男だったら腹括りやがれ」

これは、ありえなさ過ぎる物語。

異世界に飛ばされ、出会はずのない者達の交わる戯言語り。

「それにしても学園都市がない日本ねえ…… たったそれだけの違いしかねえから、ここが本当に異世界なのか時々疑問に感じるよな」

場所は地球、日本。

「無駄話はいいからよオ、帝督ンは早くトーンを貼ってくれ」

「わかってるつての。だけど、上条が元気でやってるのか気になるな」

「三下がそう簡単にくたばるわけねエだろ。今頃暢気にフラグ立ってンだろ？」

「そうだな」

この物語に、上条当麻は登場しない。

「こんな感じでいいんですか？」

「おう、やればできンじゃねエか、レイフォンクウン。しかし、さっきはセンチメンタル入ってたなア。元の世界が懐かしいってか？」

「少なからず思うところはありますね。でもこの世界は凄いですよ。大気がまったく汚染されていなくて、普通に外に出ることが出来る。海なんてもの、僕は初めて見ました」

「確かレギオスって言ったか？ 異世界には珍しいモンが存在すんだな」

その代わり、レイフォン・アルセイフと言うイレギュラーが存在する。

「だが、この世界にも珍しいもの、見所はたくさん存在するぜ。秋葉原も普通にあるしな。明後日辺りに男3人で行かねえか？」

「すみません、明後日はフェリとデートなので」

「死ねよ、リア充」

一方通行、垣根、レイフォンを中心に巻き起こる無双ストーリー。

「彼女持ちはいいよなア。しかもロリっ子だぞロリっ子。つるぺたボデイだぞ。羨まし過ぎンだろ」

「彼女じゃありません、妻です。それにフェリは年上なんですけど」

「うるせえよ、馬鹿。んなもん関係あるか！」

「あア……女欲しィ……」

「あれ、でも黒子さんって一方通行さんの彼女じゃないんですか？ずいぶん仲がいいみたいでしたけど」

「そオ見えンのか！？いやア、いい奴だなレイフォンくん！！」

「黙って聞いてれば……誰がそんなロリコンの彼女なんですの！？わたくしはお姉さま一筋ですわ！」

ドタバタし、ゴタゴタし、ウキウキした日々が送られる。

「そう言えばよ、俺は上条が心配だから元の世界に帰れるなら帰りたいと思っているけど、お前達はどうかんだ？」

「わたくしもですね。なにせ、ここにはお姉さまがいませんもの」

「俺ア黒子ちゃんがいて、漫画が描けるってんならどこの世界でもいいぜ」

「僕もフェリがいますし、焦って元の世界に戻る必要もないですね。それにこの世界は汚染物質もないですし、汚染獣もいないですから、出来ればこのままフェリと2人で永住したいくらいです」

一部の者を除き、帰還する気が零。

「まア、戻る戻らない以前に帰る方法がわかんねェンだけだな」

「ぐぐつ……残念ですが、今は不本意なこの共同生活を続けるしかないと言っ事ですわね？」

「そういうことだな」

「ですね」

「みんなー、ご飯できたで」

「作業を中断して、リビングに集まってください」

一方通行、垣根、レイフォン、黒子、フェリ。この5人を居候させ、家事などを取り仕切るのは1人の少女。

「相変わらずうまそオだな。可愛くって、しかも料理がうまい……もう結婚してくれ、はやてちゃん」

「あはは、褒めても何もでんで、アクセラ兄ちゃん」

彼女の名は八神はやて。原因不明の病を足に抱えており、車椅子生活之余儀なくされていた。

「フォンフォン、料理を運ぶのを手伝ってください」

「はい、フェリ」

「わたくしもお手伝いします」

「ごめんな、フェリさん。レイ兄と黒子さんお願いします」

「気にしなくていいよ。何時もお世話になっているからね、せめてこれくらいやらせてよ」

「そうですわ。はやてはどんと構えていてくださいまし」

物語が始まる。5人の少年少女はそれに巻き込まれ、魔法と言つ摩訶不思議な存在を目の当たりにすることになる。だがそれは、これよりも少し先のお話。

「クロノく〜ん！」

「ちょ、淡希さん！？何をして……背中になにか当たってます！」

「当たてるのよ」

「やめてください！と言うか、息が荒いですよ！？」

「ハア、ハア……気にしないで」

「気にします！うわっ……リーゼ達と同じ臭いを感じる」

「お姉さんに全てを委ねて……ね？悪いようにはしないから。とても気持ちいいことをしてあげるから」

物語のキャスト、その内の1人は管理局に。巻き起こる波乱万丈の出来事。

「イイねイイね、最っ高だねエ！金髪ツインテのロリっ娘……最高に興味をそえられるね！」

「……あなたの持っているジュエルシールドを渡してください」

「あん？ジュエルシールドってのはこの石つころのことか？別にいいぜ」

「…………え？」

黒い魔法少女との出会い。

「ジュエルシールド、ね…………まあ、なんにしてもここは俺に任せて、
なのはちゃんは逃げな」

「そんな！？危ないですよ。だって、あれは…………」

「危ない？なのはちゃん、ひとつだけ言っておくぜ…………俺の未元物質に常識は通用しねえ」

「暗黒物質…………？」

白い魔法少女との出会い。

（私は剣の騎士、シグナム。ヴォルケンリッターを率い、数々の困難を中間達と共に乗り越えてきた）

「なんだこいつら。怪しい力を使いやがって」

（数えられないほどの修羅場を潜り抜けてきた。自分達の力に信頼を持っている）

「ほオ、それは命知らずな奴等だな。とりあえず少女以外は半殺し確定ってか？」

（数百年にも及ぶ経験、研ぎ澄まされた勘。その勘が言っている）

「油断しないでください。どんな能力を使うのかは分かりませんが、それなりに出来るようです」

（私達はここで）

「はっ、あくまでそれなりだろオが。教えてやんよ、ここに、八神家に忍び込むのがどれだけ愚かな行為かってなア」

「おいおい、俺の分も残しとけよ一方通行」

「……行きます」

（死ぬ）

一冊の魔導書をめぐる事件。
そこで交錯する騎士達と彼等。

「テメエらは何をしようと勝手だ。闇の書なシてどオでもいい。けどよオ、はやては関係ねエだろ。何の罪もねエはやてがテメエらの都合で殺されて良いってわけねエだろ。お前等にも信じる正義があるンだろオなア。だが俺は自分の信じる道を、自分の正義を突き進む。それを阻むってンなら、お前等の幻想（正義）ごとぶっ殺してやンよ！」

「心配するな、自覚はある」

「間接的とはいえ、フェリに危害を加えたんだ。楽に死ねると思うな」

とある異界の一方病的愛情
アクセラレイション
始まりません。

番外編 サウザンドマスターサカタ

「何だよこれ！？編集に文句言つてやる！」

サタデー連載作家、はまじつら しあげ浜面仕上。

彼はサウザンドマスターサカタと言う漫画を描いているが、今集合のその内容が酷いものだった。

担当である編集に文句を言うため、浜面は電話をかける。

「芳川さん、酷いじゃないですか。読みましたよ今週号の俺の漫画！」

電話に出た人物の名は芳川桔梗。よしかわ ききょう。サタデーの編集者であると同時に、

副業で研究職をしているらしい。

だが、そんなことなど浜面には関係なかった。

「え、酷いつて何？ストーリーが？」

「ぐはっ……違いますよ！誤植ですよ誤植！！セリフの文字が間違ってるんですよ」

「本当？何ページ目なのかしら？」

芳川の問いかけに、浜面は今週号のサタデーを手に取り、電話越しに誤植を訴える。

「サカタが四天王の一人、ムラタに挑む前のシーンの会話で、『あいつだけは、許さない！』って最高にかっこいいセリフが」

サカタ『パンツだけは、許さない……！！』

「に、なってるんですよ！酷いですよこれ！！」

「あ、本当だわ。やっちゃった」

取り返しの付かない誤植だと言うのに、覇気のない声で悪びれもせずと言う芳川に浜面は切れる。

「いや、『やっちゃった』じゃないでしょ！ホントに酷いですよこれ！主人公がいきなりノーパン主義に目覚めちゃったみたいじゃないですか……！」

「いいじゃない、ノーパン。ノーパン健康法なんてのもあるのよ。ちなみに私、今ノーパンね」

「ぶつ……そんな情報知らないんですよ！」

芳川のとんでもないカミングアウトに浜面は噴出しつつも、怒鳴り声で一蹴した。

「誤植はここだけじゃないんですよ！」

「……どこかしら？」

新たな誤植の指摘。苛立ちの募っていく浜面の声とは対称的に、芳川の声にはまったくやる気が感じられなかった。それがさらに浜面を苛立たせる。

「主人公が暗い過去を語って、『俺の憎しみは消えないんだ』って、

決意を新たにする最高に渋いシーンで……」

サカタ『俺の肉しみは消えないんだ!』

「になってるんですけどおお!」

「あ、ホントだわ、漢字間違ってる。やっちゃったわね」

「いや、だからやっちゃったじゃないですよね!? ちょっと!」

「肉しみて何? 脂汗? 面白いわね」

「あなたが間違ったんですよ? 何、何でそんな風に他人事なんですか?」

「だって、他人事なんだもの」

「うおおおい! 担当がそれでいいんですか!?」

血管が千切れそうなまでに絶叫する浜面。

いい加減な担当の言葉に殺意に近い怒りを感じつつ、さらに誤植の指摘をした。

「まだまだ誤植あるんですよ! 誤植」

「そう……」

「ついに現れた四天王のムラタが、『あなたがサカタですか?』っていう凄く緊迫した場面で……」

ムラタ『あなたが銀時ですか？』

「漫画違つてしょう！銀時って銀。の主人公じゃないですか！確かに苗字一緒ですけど、あっちは漢字でこっちはカタカナですから！」

「あ、ホントだわ……」

「それだけじゃないですよ。誤植はさらにあるんです！」

「まだあるの？いい加減多すぎない？」

「だからあなたが間違つたんでしょう！」

「だるい……もう電話切つて、寝ていい？」

「駄目に決まつてるでしょう！」

怒鳴り散らしながら、浜面は次の誤植を指摘する。

「次のコマです。サカタが『俺がサカタだ』っていうクールなシーンが……」

サカタ『俺はロリコンだ！』

「なんで主人公が変態宣言してんですか！？もうわざとですよね？わざとなんでしょー！」

「違つわよ……ああ、本当ね。間違つてるわ」

「間違い過ぎです!!」

「でもホラ、これってあなたの性癖でしょ？」

「違います！と言つか怒りますよ？いい加減怒っていいですか？今から自宅に殴りこみに行きますよ!!」

「今日は眠いから、日を改めてね」

「どれだけ眠いんですか？ってか、今は昼ですよ。仕事はどうしたんですか!？」

「今日はサボリ」

「前々から思ってたけど、本当に駄目人間だこの人！」

芳川の駄目人間っぷりを再認識した浜面は、疲れ果てたように更なる指摘をした。

「次の誤植ですが……」

「まだあるの？眠いから早くして」

「どんだけ寝たいんですか!？ってか、悪いって思ってます!？」

「いいからはやく」

「……最後のページで『俺の新しい技を見せてやる!』っていつドキドキのシーンで」

「うんうん……」

サカタ『俺の新しい性癖を見せてやる！』

「性癖ってどれだけ引つ張るんですか！？主人公、ロリコン以外に変な性癖があるんですか！？」

「そんなに怒らないでよ。今度バニー服着てあげるから」

「ぐっ……騙されませんよ、そんなんじゃ俺は騙されませんよ！」

バニー姿の芳川を妄想して悶える浜面だったが、持ち直してさらに芳川を攻め立てる。

「もっと酷い誤植が最後のコマにあるんですよ！サカタが魔法を放つために呪文を詠唱するシーンなんですけど……『氷天の碎け落ち、嵐と共に葬り去る滅びの呼び声を聞け！咬撃氷狼破！』って言う台詞ですが……」

サカタ『エターナルフォースブリザード！！』

「……………もう言葉も出ないですよ！しかもこのコマについてる煽り文句！なんですかこれ！？」

脱力し、もはや投げやり気味に言う浜面。

ページの最後の煽り文句は、こう書かれていた。

『眠い、めんどくさい。働きたくないでござる』

「煽り文句で愚痴らないください。ってか、なんなんですかあなたは？働きたくないんですか？なのになんで編集と研究員を掛け持ちしてるんですか！？」

「なんでかしら？ああ、仕事辞めたい……働いたら負けだと思っわ」

「なら仕事辞めたらどうですか！！」

「いいわね、それ」

「え……？」

浜面としては怒りに任せ、電話越しに精一杯怒鳴っただけだった。だけど芳川はそれを真に受け、やる気の感じられなかった彼女の声からはウキウキとした声が漏れてくる。

「多少の貯蓄はあるし、それを浪費して優雅に暮らすというのも悪くないわ。無くなったら無くなったで、その時はどうにかなるでしょう。明日は明日の風が吹く、ってね。最悪、親友の家にも転がり込めばいいし」

「芳川さん？何言ってるんですか芳川さん！？あと、あなたにとって親友ってなんなんですか！？」

「これから辞表を書かないとね。忙しくなるからこれで切るわよ」

「切るなアアアア！！」

浜面の絶叫を無視し、芳川は本当に電話を切って辞表を書き始めるのだった。

数日後。

「もしもし、少年サタデーの結標です。お疲れさまです」

「え、結標さん？」

サタデーの編集部から電話がかかり、それに浜面は出た。相手は編集者の1人、結標^{むすじめ}淡希^{あわき}。浜面自身も何度かあったことがあり、個性的なファッションをした女性だと覚えている。

「今日から私がサウザンドマスターサカタの担当になりました。よろしく願います」

「あ、はい、よろしくお願いします……あの、芳川さんはやっぱり……」

「はい、辞めました。『ニート王に、私はなる！』なんて馬鹿なことを言いながら辞表を叩きつけていました」

「親泣きそうですね。まあ、あの人のことは放っておきましょう。それよりこれから打ち合わせですか？」

やっぱりと思いつつ、浜面は乾いた笑みを浮かべながら淡希に尋ねる。

「はい、これからご自宅にお伺いしたいと思いますので。それから先に言っておきますが、サウザンドマスターサカタ、次で最終回です」

「うそーーーーー！？」

そんな彼女からのとんでもない発言に、浜面は絶叫した。

「悪く言えば打ち切りですね」

「わざわざ悪く言わないでください。ってか本当に！？冗談なしで打ち切りですか！？」

「元々あまり人気がなかったですけど、今週号ではぶっちぎりでアンケート最下位でした。海原先生の『超電磁砲一直線』より人気なかったです」

「マジですか！？でも、急に最終回と言われても困りますよ。俺の漫画やつと盛り上がってきたところなのに……せつかく四天王とか出したのに……」

「俺達の戦いはこれからだ、みたいな終わり方でいいんじゃないですか？」

「ありますけど！そういう終わり方の漫画って良くありますけど……俺の漫画の場合、敵のボスのタカスギに主人公の両親が捕まっているじゃないですか。しかも食事は1日に食パン1枚で、地獄のような労働を強いられているんですよ」

「それがどうしたんですか？」

「いや、ですから……タカスギを倒さないとすつきりしないって言うか、終われないって言うか……」

「ですが打ち切りは決定ですので、倒すならさっさと倒してください」

「ですが、そのためにはいろいろ条件があつて……タカスギの城の門を開くには四天王を倒さないといけませんし、タカスギを倒すには魔剣が必要なんですよ。しかも今戦っている四天王のムラタはヴァンパイアなので、13回殺しないと死なないんですよ」

「何でそんな風にめんどくさい設定にしたんですか？」

「13話くらい引つ張ろうと思ひまして」

「打ち切られて当然ですね」

淡希の冷静な突込みが入るが、浜面は取り乱し続け、がしがしと頭を掻きながら言う。

「あと、主人公に生き別れた幼馴染がいるらしい事を第1話からほめかせてるんですけど、これ、どうしましょう？」

「さあ？浜面先生もプロならうまくまとめてください」

「はあ……それで、ページは何ページもらえるんですか？」

淡希の冷たさにテンションを下げられる浜面だったが、彼だって漫

「も、もう少年サタデーでは描きませんかね!」

「どうぞ」

それをあっさりと受け入れる淡希。

「うわあああああああんっ!」

浜面は泣きながら、たった3ページの漫画を描き始めるのだった。

サウザンドマスターサカタ 最終話 ラストマジック 最後の戦い

サカタ「くらえムラタ!!」

ムラタ「来なさい、サカタ！実は私は一回殺されただけで死にます。
ぬ、ああああああああ……」

オカダ「ムラタがやられたようだな……」

サイト「しょせん、奴は四天王最弱」

カツラ「人間に負けるとは、魔族の面汚しだな」

サカタ「エターナルフォースブリザード!!」

オカダ・サイトー・カツラ「ぎゃあああああああ!!?」

サカタ「ついに四天王を倒したぞ!これでタカスギの城に行ける!」

タカスギ「よく来たな、サカタ」

サカタ「なっ……ここがタカスギの城だったのか!?」

タカスギ「戦う前に言うておくことがある。お前は魔剣がないと我を倒せないと思っているだろうが、別になくとも倒せる」

サカタ「なんだって!?!」

タカスギ「それからお前の両親は痩せてきたので最寄りの村に解放してきた。後は我を倒すだけだ」

サカタ「ふっ、そうか……俺もひとつだけ言うておく。俺には生き別れた幼馴染がいた気がするが、別にそんなことはなかった」

タカスギ「そうか」

サカタ「いくぞタカスギ!」

タカスギ「来い、サカタ!!」

煽り文句『今、決着の時!ご愛読ありがとうございました』

番外編 サウザンドマスターサカタ（後書き）

ソードマスターヤマトのパロです。それをまづらでやりました。ただそれだけの番外編。

こうして浜面はサタデーから去り、スキルアウトに堕ちていくのでした。

中の人のネタ的には上条さんを組ませて漫画を描くのもいいですけどねw

それと芳川はもうダメだ……黄泉川にがんばって養ってもらわないとw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6469y/>

とある作家の一方通行

2011年11月28日00時50分発行